

私の授業づくりと授業実践

第1回オンラインセミナー「私の授業づくりと授業実践」をふりかえって

島 恒生（畿央大学）

日本道德教育方法学会オンラインセミナーの第1回「私の授業づくりと授業実践」が、2021年9月5日（日）13時から行われました。

オンラインセミナーは、学会員の道德教育に関わる研究や関連諸分野の学際的総合研究の推進に資するため、本年度より始まったものです。今年度は、全部で3回行われますが、その第1回目でした。谷田会長からのご挨拶に始まり、学会25周年記念事業で作成したDVDに収録された授業映像を使い、授業者による発表ならびに質疑を通して、「考え、議論する道德」の実現に向け道德科の授業づくりで大切にしている考え方や具体的な工夫について考えました。

参加者は、38名で、そのうち17名からアンケートの回答をいただきました。今回のオンラインセミナーについて「非常に満足した」「満足した」が15名、「どちらでもない」が2名、今回のオンラインセミナーの内容で自身の実践や研究に役立つところが「非常にあった」「あった」が16名、「どちらでもない」が1名と、よい評価をいただきました。また、回線トラブルもなく、小川企画委員長の閉会のご挨拶にもありましたが、オンラインを使っただけの研修という、これからの学会活動の広がりを感じさせるものとなりました。

内容については、Part1とPart2の2つに分け、それぞれ、授業者の発表（DVD視聴を含む30分）の後に質疑応答（15分）とまとめ（10分）を行いました。詳しい内容については、担当して下さった方々から報告していただきますが、ここでは、参加者からいただいた感想をいくつか紹介します。

- 先生方のご実践を学べてよかったです。ありがとうございました。
- 授業の理論・実践論は努力して継承しないといけない。
- 授業の実際をわかりやすくダイジェストにまとめてくださっていて、ありがたかったです。やっぱり、授業を見ることができるといいですね。発表の内容もそれぞれの先生の思いがしっかりと出ているもので、主張点が明確で考えやすかったです。運営等、お世話になりました。
- 実際の授業の様子を見せていただけたことと、その授業に対して服部先生、田沼先生が専門的な視点でコメントくださったことがとても参考になりました。

関係して下さった会員の皆様には、大変お世話をお掛けしました。第2回、第3回のオンラインセミナーも、楽しみにしてください。

授業実践 Part 1 小学校第5学年 主題「自分の長所を信じて」

授業実践の見どころ：進行を通して

庄司 量士（大阪市立舎利寺小学校）

本学会初のオンラインセミナーのトップバッターを飾ったのは、久米島小学校の菅間伸也氏と眞榮城善之介会員でした。セミナーのテーマに則り、「ゆさぶりと問い返し」、そして「ファシリテーション」を重視した授業づくりについての提案がありました。

教材「日本の『まんがの神様』」を用いた授業実践の動画を視聴した後、授業をもとにした提案があり、その具体を確認することができました。有効なファシリテーションをするためには、内容項目や教材について子どもが「何をわかっているか」、「何に気づかせたいか」を確認したうえで、具体的なねらいを設定しておくことが重要であることについて述べられ、この具体的なねらいがあるからこそ、映像にあるように指導者は、はっきりと意図を持った発問ができ、児童の発言にも的確に反応できることがわかりました。また、多面的・多角的な考え方に広げるために、主人公の「治虫目線」だけでなく、世間の人等の「周り目線」を考えさせるといった、目線を変える工夫の提案がありました。本提案の中心となる「ゆさぶりと問い返し」「ファシリテーション」については、参会者との協議を通して、「子どもの

発言の腰を折らず」「子どもの発言をまとめず」「子どもに喋らせる」といった指導者が我慢する意識や、子どもと一緒に課題を見つけていく意識をもっておくことの重要性が見いだされました。授業映像にあった、児童の「あー、人生が上達していくことだな」という発言は、有効なファシリテーションの中で出てきたものと考えられました。さらに、偉人を扱った教材では、自分自身の生き方に結び付ける難しさがありますが、身近な友達をモデルケースとして考えることを通して、自我関与につなげることも可能であり、ここでも指導者のファシリテーションが鍵となることもわかりました。

今回はあえて若手教師の実践を紹介されました。内容項目と子どもの実態から具体的なねらいを設定し、ポイントをおさえた教材研究をすることで、「考え、議論する」道徳授業に結び付く指導が可能になることを感じられる貴重な実践報告となりました。

まとめ

服部 敬一（大阪成蹊大学）

菅間先生と眞榮城先生からの授業づくりについての提案は、次の点で重要です。

1 本授業で児童に何を分かせたいのかを明確にする

児童は学校で学ばなくても、道徳について多くのことを知っています。そのような児童がもともと知っていることをねらいにしても、そこでの気づきはありません。

本授業提案では、事前に児童が内容項目について分かっていることと、教材を読めば分かることを書き出し、消去法的にねらいを見つけ出しました。このことは、道徳の授業のあり方を児童にとって気づきのあるもの、考える価値のあるものへと変革しようとするものです。

2 主発問では当たり前のことを聞かず、問い返しやゆさぶりによって児童の思考を深める

児童の考えを深めるためには、児童にとって分かりきった主発問をしないこと、さらに、問い返しやゆさぶりが重要であることは言うまでもありません。しかし、どのようにすればそのような適切な主発問、問い返し、ゆさぶりが可能になるのでしょうか。

本提案では、ねらいと同様、児童がもともと知っていることや、教材を読めば分かることではない、児童が本気で考えられるような主発問を準備しました。さらに、考えを深めさせる問い返しやゆさぶりのためには、教師自身が、主発問の意図（何のために発問するのか、何を考えさせたいのか、どんな反応を期待しているのか等）を明確しておく必要があります。それによって、児童の発言に対して何が足りないか、どこまで深めさせたいかがはっきりします。また、児童の捉え違いによる誤りや、言葉足らずの発言に対しても、その発言に寄り添い、真意に気づかせ、引き出すことが可能になるのです。

3 児童の対話を大切にし、教師はファシリテーターになる

本提案では、教師の発問と児童の反応が一問一答になるのを避けるために、発表しやすい学級の雰囲気づくりとともに、児童同士の発言がつながるように、教師は児童の発言の置き換えをせず、全ての発言を取り上げ、さらに、説明不足の発言には教師が分からないフリをするなど、児童が語彙を精一杯駆使して分かりやすく説明するように仕向けました。そのことは、児童が安心して発言し、対話を深める上で非常に重要です。

授業実践 Part 2 小学校第5学年 主題「成長の力を心に宿す」

授業実践の見どころ：進行を通して

加藤 英樹（名古屋市立南陵小学校）

岡崎会員のご発表は、小学校5年生を研究対象とした「日頃からの学級経営で子どもたちの自己肯定感を育成し、その基盤の上で行われる道徳科の授業で自立への成長動機を育成すること」を目的としたものでした。

基盤となる学級経営では、「ふり返し」を重要視し、日頃から各教科・領域での活動で次のような視点を設けて、各授業で必要に応じた項目を使っています。

- ① 今日の学習のポイント、学んだこと、考えたこと
- ② できたこと、わかったこと、発見したこと、自分の考えが変わったこと
- ③ 前の学習とのつながり、生活に活かせること、次の授業でしてみたいこと
- ④ 疑問に思ったこと、興味がわいたこと

- ⑤ どうするとわかるようになったのか(学び方)
- ⑥ 友達が頑張ったところ、友達のよかったところ、友達から学んだこと
- ⑦ 自分がこだわったところ、自分が頑張ったところ、成長したところ

また、行事や学期のはじめには、自分自身でその目的や自己の目標について考え、振りかえるという取り組みを続けられました。その結果、学級を開いて9か月経過した1月には自己肯定感の高まりを示す成果が見られました(連想調査の結果による)。

そういった基盤が形成された上で、また、自己肯定感の量的増加から質的変容を期待して、「成長の力を心に宿す」ために取り組まれた道徳科の授業実践は、

【主題】 よりよく生きる喜び

【教材】 心のなかのりゅう(「みんなの道徳5年:学研教育みらい」に掲載。本時では原典にあたり、教科書とは一部表現および内容に違いあり)

として行われました。「龍」は岡崎先生の学級で学級目標に設定されており、子どもにとって自分で成長することのシンボリックな存在として認知されていたそうです。

「人としてどう成長できるか」を学習課題とし、「自分の中の龍をどう育てたいか」について「手作り連想マップ」という手法を用いてグループによる共同学習を行い、育てたい龍の姿、未来世界で自分の龍がしている姿を話し合いました。

そうした授業の結果、「自分」というキーワードから連想できる言葉の変化が顕著で、授業前は「5年生」「人間」などといった「属性」に関わる言葉が多かった学級が、授業後には「先を目指す」「夢を持つ」などをはじめとした「肯定」的な言葉が多様に(量的に多数になり、個別の課題・目標として広がりをもって)出現するようになっていました。

まとめ

田沼 茂紀(國學院大學)

オンラインセミナー「私の授業づくりと授業実践」Part 2でご提案いただいた岡崎耕先生(長崎市立長浦小学校)の取組について、粗々ではありますが概観しつつ、コメントしていきたいと思えます。

岡崎先生の提案は、サブテーマで示されているように子供の「自己肯定感」を育む学習母体としての学級づくりを基盤にしなが、一人一人の内面にある「成長動機」に働きかけて育成を図るといった継続的展望を前提とした実践となっていました。

その点で、管見の視点から1単位時間の実践のみで道徳科指導の成果を語るのではなく、一定スパンの中でどのように子供が成長していったのか、その成長機会となるよう構想した道徳科授業がどのように子供たちの内面に作用していったのかを手作り連想マップ等の活用を通して明らかにしようとした意欲的な取組の実践研究でもありました。道徳科授業実践報告と称するような場合、ともするとそのメソッドや教材等を過大評価するような傾向も散見されがちです。そんな観点から本実践を捉えますと、決してそのようなことはありませんでした。むしろ、教育臨床的な側面から学級経営を構想し、さらにそこから道徳科授業を構想するというエビデンスベースな教育実践および継続的な道徳科授業マネジメントに基づく教育実践を体現した研究となっています。その点で大変興味深く、実践に係る手法も高く評価される研究であると思う次第です。

道徳科授業実践を語る時、授業者はその1単位時間での指導に過度の期待を寄せがちです。果たして、提示した一教材のみで子供は継続的な変容を見せるのか、用いたスキルの導入によって子供の内面は大きく変容してそれを継続できるのか、大いに吟味すべき事柄であろうと考えます。確かに優れた教材は子供の心に楔を打ち込み、内面を覚醒し、新たな価値観創造の機会をもたらします。確かに優れた指導手法は子供の心を驚つかみにし、魂を覚醒し、新たな価値観創造の機会をもたらします。しかし、日常的には平凡な指導しかできないと評される教師であっても、先見の明をもったたゆまぬ授業マネジメントへの努力を重ねるなら、間違いなくその方が前者を上回る指導成果を生むことは明らかです。これだけは確信をもって断言できることです。道徳科授業は、一度限りのマジックショーではないのです。むしろ、延々と明日へ続く果てしない賽の河原の石積みみたいなものであると例えた方が適切な表現であろうかと思えます。

コロナ禍というどうにもならない学校教育の現場にあって、それに抗うように立ち向かう全国の教師たちがオンライン研究会等を立ち上げ、盛んに切磋琢磨している姿を垣間見ると、その逞しさと健気さに落涙の思いが致します。でも、気になることが少しだけあります。それは、短兵急な指導スキルの獲得のみに汲々としていないかという冷や水的な懸念です。本実践研究から大いに王道を学んでほしいと思えます。